

少子化危機突破タスクフォース（第2期）情報提供チーム第1回

1. 日 時 平成25年10月22日（火）15:30～17:30

2. 場 所 中央合同庁舎4号館第4特別会議室

3. 出席者

森 まさこ 内閣府特命担当大臣（少子化対策）

（構成員）

安藏 伸治 明治大学政治経済学部教授、日本人口学会会長

井上 敬子 文藝春秋「CREA」局出版部統括次長

後藤 憲子 ベネッセ教育総合研究所 次世代研究室室長

齊藤 英和 国立成育医療研究センター母性医療診療部不妊診療科医長

宋 美玄 川崎医科大学産婦人科

宮島 香澄 日本テレビ報道局解説委員

（内閣官房）

吉村 泰典 内閣官房参与

4. 議事次第

- （1）情報提供チームの活動方針について
- （2）江戸川大学メディアコミュニケーション学部教授濱田逸郎氏
（日本広報学会前理事長）よりヒアリング
- （3）後藤憲子委員よりヒアリング
- （4）安藏伸治委員よりヒアリング
- （5）意見交換
- （6）森大臣からの挨拶

5. 議事概要

- （1）情報提供チームの活動方針について
事務局からタスクフォースの第1期からの議論の経緯について説明。
安藏リーダーから資料1に基づいて、情報提供チームの活動方針を説明。

情報提供チームの活動方針について、資料1とすることを確認。

(2) 江戸川大学メディアコミュニケーション学部教授濱田逸郎氏(日本広報学会前理事長)よりヒアリング

濱田氏のプレゼンテーション

資料2に基づき、「いま行政広報に求められるもの」として、行政広報とは、行政広報の枠組み、本施策の情報提供の課題などについてプレゼンテーションが行われた。

濱田氏のプレゼンテーションに関する質疑

- ・(宋委員)間違っている情報ほど広まりやすい。メディアが発信する情報で明らかに医学的に間違っていることについて、情報を正す機関があるといいと思う。
- ・(濱田氏)ソーシャルメディアの場合には、比較的間違いが出ているが、間違いを間違いとして指摘することによって、修正されることがよくある。むしろ今、問題になるのは、直接当事人同士でもってやりとりをするもの。クローズドな中で情報が流れていくときにマイナス情報は訂正されないままに定着しているということが極めて多く、これが非常に大きな問題。

むしろ医学について造形の深い方が妊娠・出産等に対する誤解を解くようなためのサイトも、タスクチームの中で検討していく必要があるのではないか。これは医学界がやっていただければ一番いい。当たり前のことを言っていると、なかなか話題を呼ばないが、これは違いますという情報は、かなり広がる可能性がある。

- ・(宋委員)広く知れ渡っている知識を、これは違うと言うと確かに話題にはなるが、人々にとって耳触りのいい、本当であってほしい嘘の情報のほうが広まりやすい。また、情報リテラシーは人によって違う。一度誤った情報が広まると、そちらだけしか知らない人のほうが多いのではないかと思うので、実はこれは嘘だよサイトとかをマルチメディアで発信するというのはいいいアイデアだと思う。
- ・(安藏リーダー)特に医療情報にかかわるものの情報発信は個人を特定できないようにするような仕組みがすごく重要。情報を出そうとすると、ソーシャルメディアになるが、利用する人たちは自分のセキュリティのことをほとんど知らないことがある。その切り分けの限度をどのように考えるか。
- ・(濱田氏)大変に悩ましい問題。今日ソーシャルメディアのマナーというか、ネットマナー、かつてはネチケットと言ったが、これは大変に難しくなっている。さまざまな悪意のこもったアプリも出現してきているといったような、問題が一方であることも事実。リテラシー教育というのは極めて重要。まだまだ未熟なところが大分あるが、それが実は今、一番大きな情報の伝達ルートになっていることもまた事実。教育をしつつ活用していく必要が現実にはあるのではないかという気がする。

- ・（安藏リーダー）特にセンシティブな内容にも入ってくると思うので、十分配慮しながらこのプロジェクトを進めていくことが必要なのではないかと強く感じている。
- ・（井上委員）雑誌の特性上、女性誌は特に警告の意味合いというより読んで気持ちがあがったり、希望を持てたりするようなものをつくるというのが使命だと思っていた。読者も希望の持てる記事をより選考すると思う。事実をバランスよく載せることには配慮しているつもりだが、卵子老化の記事も載せつつも、ハリウッドでは50歳でも子供が産めているという話を載せると、そちらのほうに希望を見出す読者は大変多く、そちらに引っ張られる。読者がそういうものを好むと、雑誌もそちらをなるべくたくさん出そうする。女性誌で高齢になっても産めるという記事が悪者扱いされるが、それをどういうふうにお考えになるか。

また、アールドメディアには炎上のリスクなどもあると書いてあるが、例えば前回、女性手帳というものが、ここで話されていることとは違った内容でTwitterなどで盛り上がったという事象があった。あれはここで話されている事実ではないことで盛り上がっていたが、国がこういう議論をしていて少子化が問題なんだということ自体は幅広く国民に知られたのではないかと思う。これはどういうふうに捉えればいいのか。例えば間違ったことがもとで拡散したしたが、その結果、多くの人がその問題について知るということについて意見を伺いたい。

- ・（濱田氏）最近どういう話題が例えばソーシャルメディアで拡散するのかというところで、キーワードとしてトークビリティ（Talkability）という言葉がある。Talk + Ability、話のネタになるような話題という意味。トークビリティの高い話題ほど拡散しやすいということ。正確でバランスのとれた情報よりも、やや平均から少し距離があるというか、物すごく驚くといったようなものがトークビリティが高い話題多少は正確性を失ったとしても話題が広がるということが大事であり、それを修正するために中核として権威のある正確な情報を出すサイトというものが必須。そういう二重の構造で考えるべきなのではないかと受けとめている。
- ・（齊藤委員）学校教育というのが1つの情報を獲得するためのいい方法であると挙げているが、発信の仕方について、すごい若い人たちをターゲットにすると、中高生にするとときどういう点について注意するのがいいのか。また、この国が教育として関与するときには、どこを注意するのが一番いいのか。
- ・（濱田氏）医学会等々でもって正確な情報を発信していただきたいという特設サイトと同様に、学校教育についてはあくまでも科学的に正確な情報を中心ということ。多少勇み足でも話題性があるというものは、恐らくふさわしくないだろうと考えている。特に今回の場合、女性だけではなくて男性も極めて重要なターゲット。しかし、男性にどれだけ情報が伝達するかとなると、容易なものではないと思う。学校教育については、女性、男性ともに基礎的な情報として、力を入れて正確な情報を伝達していくことが重要ではないか。特に男性の教育ということと言うと、もしかするとこれは得

難しい機会なのかもしれないので、十分に活用してはと考えている。

(3) 後藤憲子委員よりヒアリング

後藤委員のプレゼンテーション

資料3に基づき、「妊娠出産に関する情報発信について」として、妊娠出産に関する調査研究、妊娠出産に関する情報提供のスタンス、妊娠出産に関する情報発信をする際の留意点などについてプレゼンテーションが行われた。

後藤委員のプレゼンテーションに関する質疑

- ・(宋委員) 妊活と卵子老化というキャッチーな単語は、実際の意味と離れて単語が独り歩きしてしまうところがある。卵子が老化していくという事実を知っていたところで、人生どうにもならないこともあるので、卵子老化というのが余り声高に言われると、既に一部の女性の反感を買い始めている。政府とか公の者が必要以上に不安をおおるような単語を象徴的に使うのはどうかと思う。
- ・(後藤委員) 調査をするときに、もう少し丁寧に、こういう知識があるかどうか、テストのような形で質問することも考えたが、最終的には今、こういった言葉がメディアの中でも出てきており、認知をまず図ってみようということで聞いてみた。
- ・(宮島委員) 正確で正しい情報が広まるのはいいということが基本で、確かにそうだが、世の中には正確で正しくても受け入れたくない人がいるということはどう考えるか。それぞれの状況によって積極的に話を聞きたくない人もいる問題、これが正しいとある程度以上の強さで言ってほしくないテーマがある。どんどん話がマイナスに広がる人もいることは確か。どの情報伝達の方法はどこに到達するかということをも物すごく厳密に考えながらいかないと、かえって背を向ける人たちがふえてしまう。強制的にでもこの情報を知ってと言いたいのはむしろ男性。一定程度知識があって、悩んでいる人たちには強制的に言う必要はない。10代、20代の方はシンプルに情報として持ったほうがいい。それぞれに対しての適切な情報伝達というのが本当に難しいと思う。結婚とか出産というのは、女性が知ってだけいればできるものではなく、ままならないことがたくさんある中で、そのパーツの中の1つとしての医療情報をどういうふうに使っていくかという難しさがあると思っている。
- ・(安藏リーダー) 妊娠・出産については医療情報になるが、この調査を見ても、結婚の話まで出てくるので、情報提供の目的を案で示したとおり、私たちのライフプランとかライフコースを通して家族形成にかかわるようないろいろな情報提供ということで、情報提供の間口も広がるように思うので、非常に勉強になった。
- ・(齊藤委員) この調査項目の中に雇用の状況とか、正規、非正規と収入などの調査項目はあるのか。

- ・（後藤委員）ある。クロスをかけていくと、子供を持つ意向などに非常に影響しているので、交際相手がいないとか、結婚を考えていないという人たちの中には、そういうことの影響というものが非常に色濃く出ていると思う。

（４）安藏委員よりヒアリング

安藏委員のプレゼンテーション

資料４に基づき、「少子化の問題」として、わが国の少子化の推移、少子化の原因、「結婚・妊娠・出産に関する知識の普及ならびに啓発に関するアンケート」の結果などについて、プレゼンテーションが行われた。

安藏委員のプレゼンテーションに関する質疑

- ・（齊藤委員）医学的に20代中ごろが妊娠適齢期と考えているので、人口学的に言った場合に最終的な目標を何か少子化で設定するときに、ピークはこの時期に持ってくるようなことにするというのは、1つの目標になるのか。
- ・（安藏リーダー）なり得るだろう。平均初婚年齢が一瞬下がった時期がある。それが第2次ベビーブームのときで、16ページの表。平均初婚年齢が1970年代初めあたりに下がってきて、男性が27歳ぐらいだったら26歳ぐらいに下がったりしているので、結婚ブームをつくる何かチャンスがあるとしたら、次のオリンピックかなと思っているが、そういう結婚したくなるような雰囲気が出てこない。あとは女性の就業継続ができるとか、若くても男のほうが収入がなくても食べさせていけるぐらいな感じの社会の変化とか、そういうものできないと、これからの男女は共働きでないと結婚できない。

（６）森大臣からの挨拶

- ・ これまで少子化対策については、さまざまな施策に取り組んできたにもかかわらず、結婚や妊娠、出産についての希望がかなわず、結果として合計特殊出生率も近年微増ではあるものの、楽観できない状態にある。
- ・ 本年6月7日に少子化社会対策会議において決定した少子化危機突破のための緊急対策においては、これまで取り組んできた子育て支援の強化、働き方改革の強化に加えて、これまで取り組みが弱かった結婚、妊娠、出産支援の実現に向けた取組を推進していくこととしている。これは安倍内閣のアベノミクス、三本の矢の3本目の矢である日本再興戦略にも明記をしたところ。
- ・ こうした中、妊娠・出産等に関する情報発信により、国民の皆様方が正確な情報に触れる機会が増大することが大変重要であると思う。こういった情報提供、普及啓発

の内容、提供手法について検討を行っていただき、よい結論に導いていただきたい。

(7) その他

【事務局より】

次回は医療の専門家の方からプレゼンテーションをいただく。日程については、日程調整をさせていただいた上で、詳細は追って御連絡する。